

ピクラー・アプローチ（1） —エミ・ピクラーの生涯— クレア・カロ著「ピクラー・コレクション」より

川内 紀世美*

2024年1月31日受理

はじめに

エミ・ピクラー（Emmi Pikler, 1902-1984）は、「自由な運動発達が赤ちゃんの生き方を変える（freie Bewegungsentwicklung verändert die Lebensweise des Babys¹）」という信念をもち、乳幼児の運動発達の理論を構築し、乳幼児への養育者のかかわり方を提唱した。その教育理論²および育児方法はピクラー・アプローチ（Pikler Approach）と呼ばれ、欧米を中心にその保育実践ならびにペアレント・トレーニングが広がりを見せている。ヴァルドルフ教育における幼稚園就園前の子どもの教育は、ピクラーの教育理論の影響を受けているともいわれている³。本稿では、エミ・ピクラーの生涯を辿り、教育理論構築の背景を明らかにする。

なお、人名の表記は、可能な限り母国語の表記を付すことを心がけた。ハンガリーでは姓名順で氏名を表記するが、他の欧州の表記に倣い名姓順に統一した。

1. 誕生から1920年代

（1）エミ・ピクラー誕生

エミーリエ・マドレーネ・ライヒ（Emilie Madeleine Reich）、後のエミ・ピクラーは1902年1月9日、オーストリア＝ハンガリー帝国のウィーンで誕生した。母ヘルミーネ・ライヒ（Hermine Reich, 1873-1914）はウィーンの幼稚園教師、父ハインリヒ・ライヒ（Heinrich Reich, 1867-1944）はハンガリー系ユダヤ教徒⁴で職人であった。ウィーンで幼少期を過ごしていたが⁵、1908年に家族はハンガリーのブダペストに移住した。ピクラーが12歳の時に母が亡くなった。母親の早世が、ピクラーの医者になるという決心の一因になったかどうかは定かではない⁶。

本稿では、エミーリエ・ライヒまたはエミ・ピクラー

という呼称に関して、愛称である「エミ」を用いることにする。

（2）ウィーンの医学生として：

ピルケ教授、ザルツァー教授のもとで

第一次世界大戦後、エミはウィーンに戻り、医学生となった⁷。1920年代にウィーン大学小児科病院（Universitäts-Kinderklinik Wien）⁸のクレメンス・フォン・ピルケ（Clemens von Pirquet, 1874-1929）教授⁹、ハンス・ザルツァー（Hans Salzer, 1871-1944）教授¹⁰のもとで小児医学を修めた¹¹。

ピルケ教授は、医学生の実践的訓練を重視するだけでなく、病院内の子どもの日常生活に関心を寄せていた。病気より子どもの健康を重視しており、子どもには屋外で新鮮な空気を吸ってよく遊ぶことが必要だとしていた。また、栄養学の研究に関連して食事にも具体的な指示を出していた。ピルケ教授がサルトジェネシス（健康生成論／健康創成論）を重視していたことは、後のエミの専門的活動に多大な影響を及ぼすことになり、エミはピルケ教授を「最初の教師の一人」と呼んだ¹²。

ザルツァー教授もまたエミにとって「最初の教師の一人」であり、子どもを診るときに、病気の治療というよりはむしろ、一人の人間として子どもに向き合うことに焦点を当てており、子どもとの関係を築くのに時間をかけ、子どもが診察や検査を怖がらないように、必要なだけ子どもと話をした。

エミは、ザルツァー教授の病棟で閲読した事故統計により、屋内で暮らす裕福な家庭の子どもよりも、下層階級の子どもの方が、骨折や脳震盪が少ないことに気付いた¹³。

自由に歩き回り、走り回り、好きな場所で遊ぶこと

*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

に恵まれた子どもは、より注意深く、より身体能力が高く、怪我をせずに転ぶことができたようであった。それに比べ、裕福な家庭の子どもは、過保護にされ、動きが制限され、自分の身体能力や身体能力の限界がわからないでいた。さらに、身体的視点から子どもの育て方を調べてみると、社会階層を問わず、すべての子どもが、身体や身体の動きを補助され、座らされ、支えられ、歩かされていた。しかも、裕福な家庭では、身体の発達を促すために、赤ちゃんの手足を手作業で動かすことに特別に時間を費やしているということをピクラーは発見した。¹⁴

2. 1930年代

(1) 結婚と育児

エミはウィーンでジョルジ・ピクラー (György Pikler, 1903-1969, György Péterの呼称をもつ) に出会い、1930年に結婚した。その当時、ジョルジは高等学校の数学教師で、進歩主義的教育観をもっていた¹⁵。彼は著作の中で、子どもは自分の発達のペースに合わせて勉強を進めるべきだと強調した。エミとジョルジは子どもの発達についての関心を共有していた。1931年に最初の子どもの娘アンナ (Anna Pikler, 1930-、結婚後はAnna Tardos-Neuschloss) が誕生すると、夫妻は娘の健やかな成長のためにできることはすべてやろうと決めた。親として、二人は娘の発育を無理強いしないことに決めた。そのかわりに、自由な運動や自主的な遊び、そして、安心でき、親しさや尊敬に満ちた人間関係に根ざすことによって、娘の身体の発達が自然に展開するように、十分な空間と時間を与えた。

ユディット・ファルク、エーヴァ・カロ編

『ローツィの40年：

施設における乳幼児の育児と養育』(2007) より

エミ・ピクラーは、乳幼児に大人の介入や刺激が必要なのか、あるいは大人の介入が子どもの発達を早めるのか、常に疑問に思っていました。仮に発達が早まったとしても、子どもの生活全体や発達への効果が適切であるかどうか疑っていました。……当然のことながら、もしピクラーが自分の仮説の妥当性を確信していなければ、この「実験」を行うことはなかったでしょう。その仮説とはすなわち、自分のペースで探索することを許される子どもは、所定の発達段階に到達するよ

うに奨励される子どもよりも、座ること、立つこと、歩くこと、話すこと、考えることをよく学習するという仮説です。¹⁶

(2) トリエステでの経験

1931年、家族3人はイタリアのトリエステに引っ越して1年間暮らした。トリエステのビーチで過ごしていたとき、エミ・ピクラーは乳幼児を連れた親達を観察した。乳幼児が自分でできるようになる前に、親が座ったり、立ったり、歩いたりすることを教えていることに気づいた。これらの観察から学んだ彼女はまた、体と心の間の関係を繋ぎ始めた。「彼女(ピクラー)は、『これは、子どもがやっていることは不十分で、子どもがまだできないことを子どもはするべきだということを、子どもに伝えているのだろうか。』と、自問した。」とユディット・ファルク (Judith Falk, 1922-2010) は述べている¹⁷。

(3) 小児診療と育児指導の開始

1932年、一家はハンガリーに移った。その3年後の1935年、ピクラー博士はブダペストで個人診療を始めた。100を超える家族を対象とした実践には、ウィーンでの事故統計の閲読やトリエステでの「手伝う」大人の観察や、娘の育児によって学んだことを組み入れることができた。

アンナ・タルドス著

『ピクラー主義の発達アプローチ入門：
歴史と原理』(2010) より

1930年代には優秀な小児科医として、彼女(エミ・ピクラー)はハンガリーのブダペストでよく知られるようになりました。彼女が世話した子どもは、100家族にもなりましたが、あまり病気になるはず、大病にかかることがほとんどありませんでした。しかしながら、小児科医として彼女は、病気の予防や治療よりも、健全な身体的・心理的発達を促すことに関心を寄せていました。彼女の考える健康な乳幼児とは、活動的で、能力があり穏やかな乳幼児であり、自分自身や自分の環境の中で平和に生きている子どもでした。彼女は毎週、乳幼児と家族を訪問し、両親の子ども観と彼女自身の観察に基づいて子どもの発達の促し方について話し合い、母親らには、育児の実践と、

彼らの子どもにとって最適で楽にできる環境の作り方を指示しました。¹⁸

(4) 看護師マリカ・レイニッツと共に

マリカ・レイニッツ (Márka Reinitz, 不詳-1963)¹⁹ がエミ・ピクラー博士と初めて会ったのは、看護師の訓練を修了して幼稚園教諭として働いていたときであった。二人は専門職において協力し始め、レイニッツがピクラー博士に付き添い、訪問看護師として働き、母親らに赤ちゃんの育児を教える助手を務めた。

(5) ギンドラーとヘンステンベルクとの出会い

1935年に、ピクラーはエルザ・ギンドラー (Elsa Gindler, 1885-1961)²⁰ の仕事を紹介され、ギンドラーの教え子エルフリーデ・ヘンステンベルク (Elfriede Hengstenberg, 1892-1992)²¹ と友人になった。ギンドラーとピクラー、ヘンステンベルクはともに、感情と身体の関係が体の構造に影響を与えると認識していた。彼らはまた、運動の内的法則が体を調整し、機会や正しい環境が与えられるときに展開していくということを認識していた。ギンドラーの仕事、ヘンステンベルクの仕事とも、身体に生じた不整合を矯正し、直すものであった。ピクラー博士のアプローチは予防的であり、情緒の安全に重点を置く自然な発達を下支えしながら、歪まない身体の展開につながるものである。

(6) ピクラー教育の英語圏への波及へ

マグダ・ゲルベル (Magda Gerber, 1910-2007)²² の家族が、1939年に出会ってからピクラーの小児診療に訪れるようになった。ピクラーの仕事ぶりを観察して、マグダは深く感銘した。そして、彼女は、1978年にトム・フォレスト医学博士 (Tom Forrest) と共に設立したResources for Infant Educators (RIE: 幼児エデュケーター [教育保育者] のリソース) という組織を通して、ピクラーの考えを英語圏に広めるのに大きな役割を果たした。

マグダ・ゲルベル著

『エデュカリングへようこそ』(1979) より

歴史的にみると、時代や場所は違うでしょうけれども、(数十年前にハンガリーで) 私も皆さんと同じように戸惑っていました。エミ・ピクラー博士に出会ったとき、彼女の考えはとても自然

で、実用的で、簡単に思われたので、私はもっと学んでみようと思いました。ピクラー博士は、ハンガリーのブダペストでいくつかの選ばれた家族を対象に個人診療の小児科医として仕事をしてきた10年間で、乳幼児を保育するための独自のアプローチを開発しました。1946年には、ブダペストにある国立乳幼児入所型保育方法研究所「ローツィ」(the National Methodological Institute for Residential Nurseries: Lóczy) で育てられた家族のいない乳幼児に、彼女は同様の根本原理を適用しました。乳幼児の日々の保育の最も細かい部分にまで必要とされた、科学の研究者そして実践者としての彼女の才能は、彼女の健全なアプローチを実践的かつ信頼できるものにしていきます。ハンガリーでピクラー博士と共に過ごしてからそれ以来、私はカリフォルニアでの乳幼児にかかわる私の仕事に、彼女の根本原理を適用させてきました。²³

3. 1940年代から2020年代

(1) 執筆活動開始：初出『赤ちゃんがすでに知っていることは何?』

ピクラーの最初の著作『Mit Tud Már a Baba? (赤ちゃんがすでに知っていることは何?)』(英訳書: Peaceful Babies—Contented Mothers) は1940年に出版された。著書では、ピクラーの考えと共に、幼児の保育や子どもの発達へのアプローチが記されている。(彼女は後年、これらの考えのいくつかを発展させて洗練している。) 今日では、英訳された部分では、エミ・ピクラーのライフワークの初期における、彼女の強さと先見の明を示すものとなっている。

(2) 孤児のための施設「ローツィ」設立

第二次世界大戦後、1946年にエミ・ピクラーは、ブダペストに住宅型保育所(乳児院)を設立するよう地方自治体から要請された。長期間の養護を必要とする乳児のために創立され、主に新生児を対象としており、結核患者の母親から生まれた乳児や、母親が産褥期に亡くなった乳児、その他に、家庭で育てることができない理由がある乳児を対象とする施設である²⁴。また、その住宅型保育所では戦争孤児も預かることになった。その役目を引き受ける条件は、マリカ・レイニッツが加わり、プロジェクトの運営を手伝うことで

あった。二人は共に、住宅型保育所で子どもの健全な発達のための環境を整えていった。

レイニッツは看護師長として、有資格の看護師からなるチームを立ち上げた。開所時は医学の訓練を受けた看護師を雇ったが、その看護師らは、ピクラーとレイニッツが入所して保育を受ける子どもの健全な発達に必要だと信じていることとは異なり、「自分の仕事をする」ように訓練されてきたことが明らかになった。ローツイ通りの住宅型保育所開設3か月後に、レイニッツとピクラーは看護職員を解雇し、専門の職業教育を受けたことがないものの子どもの世話を特別な関心をもつ若者を採用した。その後、ピクラーとレイニッツは、職員を慎重に選んでいき、独自の研修体制を立ち上げ、「新しい方法」で新しい職員を養成し、独自の教材を創っていった。レイニッツは1963年に亡くなるまで、ローツイの看護師長の地位にあった。彼女の死は、ピクラー博士にとっても、研究所全体にとっても大きな損失であった。

その住宅型保育所は、広い庭のある大きな家に設置された。そこは長い年月の間に何度も名称が変わったが、この施設の所在地ローツイ・ライヨシュ通り(Lóczy Lajos utca) という名に因んで、「ローツイ(Lóczy)」と呼ばれて親しまれてきた。ローツイは今日も活動を継続しているが、住宅型保育所としての役目は2011年に終えた。この65年間に、2,000人以上の乳幼児がローツイで生活し、ほとんどが0歳から3歳であったが、その中には7歳になるまで長期入所する子どももいた。

ローツイでは70人の子どもを受け入れる体制が整えられており、子どもは通常は2歳半まで、長くとも3歳まで乳児院で職員と共に生活した。入所期間は通常は1年間とされていた。²⁵

入所児をホスピタリズムから守るため、また、正常に発達できるようにするために、ローツイでは基本原理から養育を始めるよう心がけていた。ここでいう基本原理とは、養育者と子どもの対応関係の出現、養育の実現を意味している。例えば、子どもは何を食べるのか、適切な服装は何か、どのくらい新鮮な空気に触れさせれば(屋外に連れ出せば)良いのかという疑問に応じて養育の種類や方法を検討した。また、観察によって、大人が子どもに食事を十分に与えるためにはどのようにするか、子どもが食事をとるにはどうするのか、つまり、養育者と子どもがどのように振る舞い、

子どもと食べさせている養育者の間の共同作業はどのようになっているのかを、そして、沐浴の場面、オムツ交換や衣類の着脱の場面では等、検討を重ねた。²⁶

一つの子どもグループを受け持つ看護師が入れ替わることがないように努められた。子どもの睡眠に必要な休息、遊びに必要な空間、適切な玩具の活用が心がけられた。その一方で、看護師が良い看護のための十分な時間が確保できるように心がけられた。一人の看護師が勤務時間には通常9人の子どもの世話をするようになっていた。²⁷

ローツイで働くようになった人々のチームは、ピクラーの独創的な考えとアプローチを実行して発展させるのに、それぞれ役割を果たした。ここでは紹介しきれないほど多くのことがある。

(3) 研究活動

孤児院という環境は、ピクラーが、家族をみてきた仕事から得た自分の考えや経験、観察を確立し、そして、異なる環境で規模を拡大して実行する機会になった。ピクラーの目標は、入所児が「制度化され(institutionalised)」ないような施設を創ることだったと言われている。この新しい環境では、管理された研究条件が提供され、ローツイが数十年にわたる研究拠点になることを可能にした。研究結果は、身体的・精神的発達や、乳幼児の運動発達の自然な順序性や、連続した子ども主導の遊びに、愛着がいかに影響を与えるかを説明している。

1968年と1969年に世界保健機関(WHO)の資金提供があり(奨学金No. R/00169)、精神発達に関して、ローツイで生活していた子どもの追跡調査が行われた²⁸。ピクラー研究所で養育された子どもの社会適応に関する画期的な研究が含まれている。

乳幼児期にローツイに入所しており、後に家庭で生活した100人の子どもを調査した。追跡調査当時は、14歳から23歳となっていた。その大多数は完全な家庭環境で育ったのではなく、例えば、親が片親であったり、継親であったりした。しかし、乳幼児期を施設で費やしたことにより現れる典型的な人格障害は全くと言っていいほどみられなかった。²⁹

ボウルビィ³⁰(John Bowlby, 1907-1990)は、乳幼児期に施設で育った者は無批判に性的関係に入ると強調し、子どもを捨てるようになると指摘している。その指摘に関して、のべ158人で73人の女性を追跡調査

した。追跡調査に参加しなかった者は僅かであった。ある里子は未婚のまま子どもをもうけていた。5人の若い女性は、結婚して子どもをもうけており、そのうち1人は2人の子どもをもうけていた。すべての者が育児支援を利用していった。子どもを手放す者もいなければ、さらに子どもを予定しようとする者もいなかった。母親として、あたかも家庭で育てられていたかのように振る舞っていた。100人の追跡調査においては、調査の時点で働く意欲のない者もいなければ犯罪者もいなかった。³¹

ユディット・ファルク、エミ・ピクラー著
『研究所で養育された子どもの社会適応に
関するデータ』(1972)より

研究の対象者は13歳から22歳でした。元施設児の学業レベルは、年齢グループ平均から不利な逸脱はありませんでした。浮浪や犯罪行為もありませんでした。元施設児の女性においては、非嫡出子を出産した者はおらず、結婚して子どもを産み、自分の手で育てています。……この結果はつまり、この施設で養育された者は、一般社会によく適応していることを立証しました。そして、生後間もない時期に施設で養育された子どもの、その後の発達に特徴的であると一般的に考えられている、典型的で顕著な徴候がないことを証明しました。³²

乳幼児の運動発達に関して、ピクラーは1930年代から40年代にかけて、すでに発達の順次的なスキーマを確証しており、ローツイでの管理された条件下で乳幼児における運動発達の自然な展開を示すことができた。というのも、すべての子どもが、身体的にも感情的にも同じように扱われて支援を受けていたからである。ピクラーの比類ない業績は、乳幼児の運動発達に関する専門家の知識や理解を拡張し、今日でも指針として一本立ちし続けている。多くの者が、自然な乳幼児の運動発達に関するピクラー博士の業績と研究を参照し、多くの論文や出版物に引用されている。

遊びに関して、遊びは子どもの発達と不可分の一部であり、ローツイでは健全な遊びと遊びの支援に必要な条件を全て提供することができた。新生児から年上の子どもまで、遊びの自然な展開は詳細に記録された。ピクラー研究所はこの詳細な研究をもと

に教材を制作した。例えば、エーヴァ・カロ (Éva Kálló)・ジョルジ・バログ (Györgyi Balog) の著書『ひとり立ち、自由遊びの始まり (Az önálló, szabad játék kezdete)』、アンナ・タルドス (Anna Tardos)・ジュヌヴィエーヴ・アペリヨ (Geneviève Appelló) 監修DVD「遊びでの赤ちゃんの注意力 (A Baby's Attention at Play)」がある。また、ローツイは研究に理想的な環境であることから、マリア・ヴィンツェ (Mária Vincze) 博士によりローツイで生活する子ども集団の長期にわたる調査が行われ、DVD「赤ちゃん子どもお互いに (Babies and Children with Each Other)」に収録された。

4. アンナ・タルドスの紹介とローツイの 今日的意義

(1) ピクラー教育の継承者アンナ・タルドス

エミ・ピクラーとジョルジ・ピクラーの娘であるアンナの生い立ちは、「ピクラー・アプローチ」を体現しているだけでなく、その始まりでもある。

アンナ・タルドスは1956年に非常勤職員としてローツイのチームに加わり、1961年からはピクラー博士の旁らで常勤職員として働くようになった。彼女のローツイでの仕事には、研究、教育、経営が含まれていた。タルドスは、ブダペストのみならず世界各国で、乳幼児の発達、保育、教育に関する講演会や研修会を定期的で開催した。エミ・ピクラー博士、ユディット・ファルク博士、ガブリエラ・プシュポキ博士 (Gabriella Püspöki) に続き、1998年にタルドスは研究所所長に就任し、2011年に政府が乳児院を閉鎖して研究所を解散するまでの10年間、研究所所長を務めた。タルドスは母エミ・ピクラーの仕事を引き継ぎ、ピクラーならびにピクラー・アプローチに関する知識をもって英語圏においては多大な貢献をした。今日では、「ローツイ通りデイケアセンター (the Lóczy Street Daycare Center)」や「ピクラー親子グループ (Pikler Parent Child groups)」の支援を行っている。「ハンガリー・ピクラー・ローツイ協会 (the Hungarian Pikler Lóczy Association)」の会長として、ローツイや国外で催される研修の企画や指導に積極的に参加している。

(2) ピクラーの遺産：ローツイの今日的意義

ローツイは今日もピクラーの活動の「本部

(headquarters)」であり、「ローツィ通りデイケアセンター」、「ピクラー親子グループ」の本拠地であり、そして「ピクラー・トレーニング (Pikler Training)」を提供するだけでなく、指導者を養成する高度な技術を持った専門家たちの拠点となっている。1984年にピクラーが亡くなってからは、ローツィのチームは、ピクラーのアプローチの核心をそのままに、ピクラーの活動を熱心に継承し、推進してきた。

あらゆる分野の人々がピクラーの業績に惹かれ、多くの人々がローツィでトレーニングを受け、公式のピクラーの組織が世界中に設立され、より多くの人々が彼女のアプローチを利用できるようになっている。

エミ・ピクラーのアプローチは、文化、国や言語の垣根を超えて、保育や幼児教育、家庭を通じて人々に着想を与え続けている。ピクラーの考えを理解し、実践している人々は、子どもとの平穏で協働的な活動でのつながり、保育施設での病気の報告が極めて少ないこと、調和のとれた家庭生活、健康で元気な子ども、自分自身の成長を実感している。

ピクラーの業績が、なぜこれほど多くの異なる状況(文化、国、年齢)で効果的なのかを説明する方法を探してみると、「アプローチ (the approach)」そのものが文化であることがわかってくる。アンナ・タルドスは、「エミ・ピクラーの尊敬と愛情に満ちた赤ちゃん像の応用は、赤ちゃんが順調に発達することを助け、大人の方では、赤ちゃんの能力の内的表象を変えることや、保育者としての役割の内的表象を変えることを助けてきた。³³⁾」と説明している。

ピクラー博士の遺産が広がり、成長し、「文化化 (culturalise)」し続けているように、多くの人、がエミ・ピクラーを「最初の教師」として、また、育児の模範的アプローチの起源であると認めている。

おわりに

ピクラーの教育理論は、エミ・ピクラーが小児科医の立場、また、母親の立場から、乳幼児の健全で自然な発達を追求したことにより構築されていった。青年期に医学生として、ピルケ教授およびザルツァー教授のもとで子どもとの向き合い方を学んだことも教育理論構築に影響しているといえる。また、後にギンドラーとヘンステンベルクとの出会いが、乳幼児の運動発達の見方に影響しているといえる。さらに、看護師レイニッツとの協働、ゲルベルによる英語圏への波

及、娘アンナによる継承にみられるように、ピクラーのよき理解者らの存在もピクラーの教育理論の波及に大きな役割を果たした。

1960年代から1970年代にかけての追跡調査においては、ローツィで養育された者にホスピタリズムや人格障害がみられず、適切な養育環境が保障されていたことが裏付けられたといえる。つまり、ピクラーの教育理論が乳幼児の育児に相応しいことが証明されたのである。

ピクラー・アプローチの特色として、乳児自らが自発的に周囲の物や人とかかわるようになるまで、乳児を仰向けに寝かせたままにしているという。また、自分で起き上がることができるようになるまでは起き上がるための手を貸さないようにし、自分で座れるようになるまでは椅子を与えないようにしているという。今後の課題として、このような子どもの自発的で自由な運動に依拠するピクラーによる発達理論、教育理論、教育方法について調べていくこととする。

謝辞

2012年5月からウェブで公開の「ピクラー・コレクション：天才ピクラー博士を英語で (the Pikler collection : the genius of Dr. Emmi Pikler in english)³⁴⁾」の和訳を通して、エミ・ピクラーの生涯を概観した。サイト内の「歴史 (History)」および「人物 (People)」の箇所を中心に和訳し、本文および注釈に記した。キュレーターで執筆者はイギリスのクレア・カロ (Clare Caro) 女氏で、ピクラー、デューイ、ホルト、モンテッソーリらの教育理念に影響を受けて、「Authentic Learning Environment (本格的な学習環境)³⁵⁾」という教育実践のプロジェクトを一つの(新しい)教育モデルとして主催している。和訳及び紀要掲載のご許可をカロ女氏からいただいた。ここに感謝の意を表す。

参考文献・注

- 1 Emmi Pikler/Anna Tardos (Herg.), *Lasst mir Zeit. Die selbstständige Bewegungsentwicklung des Kindes bis zum freien Gehen*, München: Richard Pflaum, 2018, S. 11.
- 2 対象が乳幼児であるため保育理論ともいえようが、ピクラー教育としてPikler pedagogy, Pikler Pädagogik という語が用いられるため教育理論とした。
- 3 ヴァルドルフ幼稚園教師フライヤ・ヤフケ (Freya

- Jaffke, 1937-2021) が「ルドルフ・シュタイナーは幼児のニーズを私たちに真に理解させ、エミ・ピクラーがそのやり方を示してくれた。」と話したと伝えられている。人智学に着想をえた保育実践として、「LifeWays Norh America」, 「Sophia's Hearth USA」, ヘレ・ヘックマン (Helle Heckmann) によるデンマークのコペンハーゲンにある「Nøkken」、ドイツの「Der Hof in Frankfurt」、ニュージーランドの「Awhina」がある。ヘックマンは「幼児の仕事をするうちに、ハンガリーの孤児院で研究をしていたエミ・ピクラー博士の著作に出会った。彼女は、子どもの観察を通して、自信と自立が、『できる』という信念と同様に重要であることを示し、子どもの発達を基礎として自信に満ちた大人になっていくことを示したのである。」と記している。Dorothy Marlen, „Pikler with Steiner“, 2011, https://thepiklercollection.weebly.com/uploads/9/4/5/3/9453622/pikler_alongside_steiner_-_dorothy_marlen.pdf (2023年7月29日 閲覧)。; Helle Heckmann, *Nøkken: A Garden for Children: A Danish Approach to Waldorf-based Child Care, second edition*, New York : WECAN, 2016, p. 7.
- 4 Carine Riethmüller, *Pädagogik der frühen Kindheit. Die Bedeutung von Emmi Pikler und Heinrich Jacoby. Ein Vergleich*, München: GRIN, 2009, S. 4.
 - 5 Wikipedia, „Emmi Pikler“, https://de.wikipedia.org/wiki/Emmi_Pikler#Lebensweg (2023年7月29日 閲覧)。
 - 6 Montessori Kinder „Emmi Pikler – Leben und Werk“, <https://montessori-kinder.de/blog/emmi-pikler-leben-und-werk/> (2023年7月29日 閲覧)。
 - 7 Pikler UK Association, „Dr Emmi Pikler“. <https://www.pikler.co.uk/about>. (2023年7月29日 閲覧)。
 - 8 Mercedes Prodromou, *Geschichte der Universitäts Kinderklinik Wien zwischen 1945 und 1965*, Wien: Medizinische Universität Wien, 2023.
 - 9 クレメンス・ペーター・フライヘル・フォン・ピルケ (Clemens Peter Freiherr von Pirquet) は、ウィーン大学小児科で、最初の小児感染症専門医であるテオドル・エシェリッヒ (Theodor Escherich, 1857-1911) のもとで研修を受けた。1909年にジョンズホプキンス大学小児科の初代教授兼主任教授となった。急逝した恩師エシェリッヒの後継者となり、1911年にウィーン大学小児科の教授兼主任教授となった。1906年に「アレルギー」という呼び名を提唱し、1908年に「ツベルクリン皮膚検査」を発表し、ピルケ反応は彼の名に由来している。Stanford T. Shulman „Clemens von Pirquet: A Remark-able Life and Career“. *Pediatric Infectious Diseases Society*, Vol. 6, 2017, pp. 376-379, <https://doi.org/10.1093/jpids/piw063> (2023年7月29日 閲覧)。
 - 10 Alexander M. Rokitansky/Gesine Menardi, „Geschichte der Kinderchirurgie und Jugendchirurgie in Österreich“, https://www.kidsdoc.at/geschichte_der_kinder-und-jugendchirurgie_in_oesterreich.html (2023年7月29日 閲覧)。
 - 11 Pkler UK Association, „Dr Emmi Pikler“. <https://www.pikler.co.uk/about> (2023年7月29日 閲覧)。
 - 12 The Pikler Collection, „People: Prof. Clemens von Pirquet“. <https://thepiklercollection.weebly.com/people.html> (2023年7月29日 閲覧)。
ピクラー・アプローチをサルトジェニック・アプローチ (salutogenic approach 健康生成論的アプローチ/健康創成論的アプローチ) と表現する教育実践家もいる。Suzan Weber, *Profound Foundations: Woldorf Early Childhood Education and the Pikler Approach*, Heather Church (ed.), Birth to Three in Education and Care: Rudolf Steiner, Emmi Pikler and Very Young Child, New York: WECAN, 2022, p.13.
 - 13 Carina Riethmüller, *Pädagogik der frühen Kindheit. Die Bedeutung von Emmi Pikler und Heinrich Jacoby. Ein Vergleich*, München: GRIN, 2009, S. 8。; The Pikler Collection, „People: Prof. Hans Salzer“. <https://thepiklercollection.weebly.com/people.html> (2023年7月29日 閲覧)。
 - 14 The Pikler Collection, „The Genius of Emmi Pikler: Accident Statistics Observation“. <https://thepiklercollection.weebly.com/history.html> (2023年10月10日 閲覧)。
 - 15 1932年にピクラー一家はブダペストに移住した。そこでジョルジは労働者運動のメンバーとなり、1935年にはハンガリー共産党に入党した。翌年、ジョルジは逮捕され、15年の禁固刑を言い渡された。9年間服役し、囚人らがドイツに徒歩で連行されたときに彼ともう一人が脱走して刑期が終わった。この2人だけがその囚人グループの中で一命を取り留めたのである。
第二次世界大戦後、ジョルジは1945年にセゲド (Szeged) の副市長兼市議会議員となり、1948年から

1968年にかけてブダペストの全国社会保険協会 (Az Országos Társadalombiztosító Intézet) 理事長およびハンガリー統計局 (Központi Statisztikai Hivatal: KSH) 総裁を歴任した。1950年にブダペストのカール・マルクス経済大学 (Marx Károly Kozgazdaságtudományi Egyetem: MKKE) 学部長に就任した。ジョルジはハンガリー統計局の業績で知られ、統計手法と実務の再編成、1949年国勢調査実施、1960年国勢調査の準備および実施の指導、中央計画管理と計画指揮システムの統計的基礎の開発などを行った。

第二次世界大戦中、エミは世話をした子どもの親の助けを借りてユダヤ人迫害をのがれ、生き延びた。

- 16 Judit Falk, Eva Kallo (ed.), *Forty Years of Lóczy. Bringing up and providing care for infants and toddlers in an institution*; Budapest, Pikler-Lóczy Association for Young Children, 2007.
- 17 ユディット・ファルク博士は小児科医で、ピクラー研究所に48年間勤務し、そのうち12年間は所長を務めた。ピクラー研究所では、数多くの論文や著書を執筆し、ピクラーの遺産に貢献した。彼女はハンガリー語で21の科学研究を発表し、さらに7つの言語で合計64本の科学研究を発表した。ファルクは世界中で専門家として認められ、国際会議に招かれて講演した。専門的な研修を受け、講演を行い、保育者 (caregivers) に向けた研修を行い、その他いくつかの専門組織の設立や運営にも積極的に携わった。
- 18 Anna Tardos, *Introducing the Piklerian Developmental Approach: History and Principles*, The Signal World Association for Infant Mental Health Newsletter, 2010.
- 19 マリカ・レイニッツ (Márka Reinitz, 不詳-1963) とピクラーの仕事はハンガリーの第二次世界大戦開戦により中断した。
- 20 エルザ・ギンドラーはソマティック・ボディーワークの先駆者である。エミ・ピクラーのために、動きについてワークショップを行ってきたことで知られている。エルザ・ギンドラーとハインリヒ・ヤコビー (Heinrich Jacoby, 1889-1964) は、子どものもつ内的なスキルと力を発展させることを目的として、子どもの発達の自然な道筋を理解することは、欠くことのできないことであると、1920年代に見出した。ギンドラーとヤコビーは伝統的な乳幼児の教育が子どもの自発性 (initiative) にダメージを与え、子どもの発達を妨げると説いた。(ウェブサイト参照: Wikipedia 'Emmi Pikler')
- 21 エミ・ピクラーの義理の妹は片肺を摘出しており、ベルリンでエルザ・ギンドラーの教室に通っていた。ピクラーは義理の妹がブダペストに帰ってきたときに様子が変わったことに気づいた。それはギンドラーの影響によるものでピクラーの信念と似ていると思った。そこで、ピクラーはギンドラーをブダペストに招いた。ところが、ギンドラーは弟子のエルフリーデ・ヘングステンベルクを派遣したのである。Anna Czimmek, *Emmi Pikler and Elfriede Hengstenberg: The Budapest - Berlin Connection*, https://thepiklercollection.weebly.com/uploads/9/4/5/3/9453622/pikler_and_hengstenberg_by_anna_czimmek.pdf (2023年11月29日閲覧) .
- エルフリーデ・ヘングステンベルクもソマティック・ボディーワークの先駆者である。エルフリーデ・ヘングステンベルクはベルリンにあるモンテッソーリ学校で体育教師を務めており、彼女はまた、ルドルフ・ボーデ (Rudolf Bode, 1881-1970)、エルザ・ギンドラー、ハインリヒ・ヤコビーと共にトレーニングを行っていた。ヘングステンベルクは1935年にピクラーに出会ったが、ピクラーが家庭小児科医として実践を立ち上げていた頃であった。ピクラーは既にギンドラー、ヤコビー、ヘンステンベルクの作品に「つまずいて」いたが、作品は、彼女が自分の仕事で発見していた動きのアプローチにたまたま適合した。ピクラーはヘングステンベルクをブダペストに来て夏期講習を開くように招き、二人は、一緒になって「動き」を克服しようと努めた。彼女らは、子どもらは独自に運動スキルを発見して発展させることができるという考えを共有した。
- 22 マグダ・ゲルベルはResources for Infant Educators (RIE) の協同創設者である。マグダ・ゲルベルと子どもは、第二次世界大戦以前に家族小児科医としてピクラーが働いていたときに、ピクラー博士の保育を受けていた。戦後、ゲルベルをピクラー博士は友人であり続けた。1956年のハンガリー革命の後、ゲルベル一家はハンガリーを離れ、アメリカ合衆国で生活している。1978年にゲルベルとトム・フォレスト医学博士は、ピクラー・アプローチに基づいているResources for Infant Educators (RIE) を設立した。(ウェブサイト参照: Magda Gerber / RIE)
- 23 Magda Gerber, 'Welcome to Educaring' - Vol. I, No. 1, Winter, 1979.

- 24 Emmi Pikler / Anna Tardos (Herg.), *Lasst mir Zeit*, S. 25.
- 25 Ebenda, S. 25.
- 26 Ebenda, S. 25.
- 27 Ebenda, S. 25-26.
- 28 Ebenda, S. 27.
- 29 Ebenda, S. 25.
- 30 Ebenda, S. 25.
- 31 Ebenda, S. 25.
- 32 Judit Falk, Emmi Pikler, *Adatok az Intézetünkben nevelt gyerekek társadalmi beilleszkedéséről*, Magyar Pszichológiai Szemle 29. pp.488-500, 1972.
- 33 *Introducing the Piklerian Developmental Approach: History and Principles*, The Signal World Association for Infant Mental Health Newsletter 2010.
- 34 Clare Caro, *the Pikler collection*, <https://thepiklercollection.weebly.com/> (2023年11月29日閲覧).
- 35 Clare Caro, *Authentic Learning Environment*, <https://www.authenticlearningenvironment.co.uk/#/> (2023年11月29日閲覧).